
ぼくのお姉ちゃん

澤田喬平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばくのお姉ちゃん

【ZPDF】

Z0624Y

【作者名】

澤田喬平

【あらすじ】

姉の星奈とその弟の悠斗はとても仲良しで、いつも元気に遊んでいる。ある日の夜、テレビで幽霊の番組を見て怖くなつた星奈は、悠斗のベッドと一緒に寝ようとする。するとその部屋に、なんと本物の幽霊が現れる。そして一緒に遊ぼうと誘われてしまつ...

第一章 川原にて

「悠斗、早く」ひつかまで来なさい。今日」ひそは一人で川をわたるつて約束したでしょ」

「でもおねえちゃん、この石たかくてこわいよ」

ある日の昼過ぎ、一人の小学生らしき男女が、川に一列に置かれ、た四角いブロックの上で言い合っている。女の子は四年生くらいで、髪を一つに束ね、赤色のスカートをはいている。男の子はまだ一年生らしく、Tシャツに短パン姿だ。

お姉ちゃんと呼ばれた女の子は、川の真ん中あたりのブロックに立つてこしに手を当て、あきれたような顔をしている。

一方悠斗と言われた男の子は、川岸に一番近いブロックを不安そうに見ている。この状態が、カッ普法ーメンが一個でもそつなほど続いていた。

「石の上に立たないと、何も始まらないでしょ。もったと上がりなお姉ちゃんの声に、悠斗はしぶしぶ田の前のブロックによじ登つた。このブロックは、悠斗のこしくらいの高さまであり、登り切つて立ち上がった悠斗の足が、まるでケータイのバイブルのようにふるえている。

「むりだよ、ぼくこんなわたれないよ」

悠斗は泣きべそをかきながら、お姉ちゃんに助けを求めた。少しして、本当に泣きだしてしまった。

「……まったくしようがないわね」

お姉ちゃんはため息をつくと、スカートがめくれるのも気にせず、身軽にブロックからブロックへジャンプしながら、悠斗のいるところへ向かった。

カルよりもきれいにどぶお姉ちゃんは、かれいに悠斗のいるブロックに着地した。両腕で田を「ゴシゴシ」とふいていた悠斗は、突然田の前に現れたお姉ちゃんに、腕を顔から離してびっくりした。

お姉ちゃんは、そんな悠斗のふるえている手をとった。

「いい？ 悠斗、一緒にわたるのは今日だけだからね」

お姉ちゃんは悠斗の田を見ながらそつそつと、さつき自分がいたほうへ向いた。

「悠斗、あたしが合図したら一緒にとぶのよ、わかつた？」

悠斗はうん、と小さい声で答えると、お姉ちゃんのとなりに立った。

「よし行くわよ。一、二の三！」

合図とともに、一人は同じタイミングでジャンプした。お姉ちゃんはしっかりと両足で着地したが、悠斗はジャンプ力が足りず、ブロックに一步足が届かない。

悠斗は、二コートンが万有引力の法則を発見するきっかけとなつたリングのようだ、まっすぐ落ちていく。手をつないでいたお姉ちゃんも、さすがに悠斗を支える力はないようで、一緒に川へ背中から落っこちた。

落ちたとたんに一人は、川底に背中を打ちつけた。お姉ちゃんは急いで立ち上がった。お姉ちゃんのひざ辺りに水面が広がっている。お姉ちゃんは力を込め、つないだままの悠斗の手をおもいつきり引き寄せた。すると、かみの毛がぬれて頭が小さくなつている悠斗が、顔を出す。

あまりの物事の移り変わりに、何が起きたか分からずキヨトンとしている悠斗を見て、お姉ちゃんは腹をかかえて笑いだした。

「あははは！ 悠斗、あなたの頭まるでグリーンピース見たいに小さい！ もしろーい」

なかなか笑いが止まらないお姉ちゃんを見て、悠斗は涙が引っ込んだ。

「もう！ わらわないでよ。おぼれたらどうするのさ！」

悠斗が、ほっぺたをふくつとふくらませた。

「大丈夫よ。そんなに深くないんだから。それより、早く向こいつへ行きましょ！」

そう言つてお姉ちゃんは悠斗を立たせ、そのまま手をつなぎながら川の中を進んだ。

少しして向こう岸へたどりつくと、突然服が重くなつた。「やだー、パンツもびしょびしょになつちやつた」

お姉ちゃんが、スカートの中にあいている手を入れながら当たり前のことを言つていると、悠斗の『あつ』といつ声が聞こえた。

お姉ちゃんがふり返ると、悠斗は下を向いて、口をポカーンと開けている。

「どうしたの、悠斗？」

「ズボンが……」

お姉ちゃんが悠斗の下半身へ田線を移すと、悠斗がはいていたはずのズボンが、足首のあたりまで脱げていた。そして中にはいた白衣のパンツがあらわになり、戦隊もののキャラのプリントがまぶしく光っている。

お姉ちゃんは、ブツとふきだした。

「あれー？ 悠斗なんでズボン脱げてるの？ ゴムがゆるくなつてたわけ？」

「そんなのしらないよ。かつてにぬげたんだもん」

悠斗は口をとがらせると、ズボンをはこうと手を伸ばす。

その時、お姉ちゃんがその手をガシッとつかんだ。

「いいわよはかなくて。そのまま脱いじゃって。この暑さだったら、干しておいたらすぐ乾くでしょ」

悠斗はすり落ちてゐるズボンを、くつを脱いで足から外し、そばに置く。

ズボンを脱いでいる悠斗を見て、お姉ちゃんはニヤツと笑つた。

「悠斗、どうせならぜんぶ脱いじやいな。そのままだと風邪ひくわよ」

お姉ちゃんの言葉を聞いて、悠斗は顔をひきつらせた。

「え、で、でも……。だれかにみられちゃうよ」

「大丈夫よ。こんな川に来る人なんて、めつたにいないから。裸で

いたほうが、涼しくて気持ちいいしね

一年生ながら、悠斗は人前で裸になることが恥ずかしいのは、ちゃんと分かっている。いつまでも服を脱げないとしない悠斗に、お姉ちゃんはがまんできなくなつた。

次の瞬間、お姉ちゃんはすばやい動きで悠斗のTシャツの裾を持ち、あつという間に脱がした。そしてそれをポイッと投げる。

悠斗に逃げるヒマを『えず、お姉ちゃんはそのまま悠斗の体を両手でお向けにおし倒し、パンツに手をかけ、力をこめて一気に足から引っこ抜いた。男の子の象徴が姿を現す。それを見て、お姉ちゃんは少しどキッとした。

悠斗はあわてて立ち上がり、近くに落ちていたズボンで股をおさえる。

「なにするのやー。パンツかえしてよ」

悠斗が顔を赤らめながら叫ぶが、お姉ちゃんはそれには答へず、今度は自分のスカートに手をかけた。

悠斗が口をあんぐりと開けて見守る中、お姉ちゃんはスカートを外し、Tシャツを脱ぎ、そして下着もすべて取っ払った。今のお姉ちゃんは、生まれた時の姿そのものだ。

「これで公平でしょ？」

お姉ちゃんは、ペロリと舌を出した。そんなお姉ちゃんを見て悠斗は、

「へんなおねえちゃん。じぶんでふくをぬいじゃうなんて」と、両手で口をおさえながら笑つた。

お姉ちゃんは、辺りに散らかっている服をかき集め、川原の石の上に横一列に並べ始め、最後にくつしたを脱いで横に置いた。それにつられて、悠斗もくつしたを苦勞しながら脱ぎ、お姉ちゃんのくつしたの横に並べた。股をおさえていたズボンも、一緒に置く。

「さあ悠斗！ 何して遊ぶ？」

お姉ちゃんが、悠斗を見て言つた。

「石投げ！」

悠斗が、投げるまねをしながら元気よく答えた。

「またやるの？ あんた昨日は一度もはねなかつたじゃない」

「きのうはきのうー きょうはぜつたいつまくこくよ

「へえ、それは楽しみね」

お姉ちゃんはククッと笑うと、先に石を取り、川岸へ立つた。そして、野球選手もびっくりするようなきれいなフォームで、川の真ん中めがけて石を投げる。石は二回はねてポチヤンと落ちた。

「どう？ あんたもできる？」

お姉ちゃんがこしに手を渡し、誇らしげに言った。

「そんのかんたんわー。みてよ」

悠斗はそう言つと、お姉ちゃんをまねて勢いよく腕を振つた。むなしいことに石はまつたくはねることなく、近くにポチヤンとしずんでいった。

「あははは！ 一回もはねなかつたじゃない。つていうが『ボチャン』になに？ 石が大きすぎなのよ」

あまりのおかしさに、お姉ちゃんはおなかが痛くなつた。

「ふん、これかられんしゅうすれば、十かいくらいはねるようにならんね！」

悠斗は口をへの字に結ぶと、少し離れて黙々と石を投げ始めた。だが、いぐり投げてもお姉ちゃんのようにはねない。

そのうち飽きてしまい、悠斗は川に飛びこんで泳ぎ始めた。お姉ちゃんと同じように、泳ぎには自信がある。

お姉ちゃんも川に入ってきた。そして一人はしばらくの間、水をかけあつたり競争したりして楽しんだ。

川原の近くのしげみで虫を追いかけていると、となりを走つているお姉ちゃんが、そろそろ帰ろう、と悠斗に言つた。

すでに日が傾いていて、オレンジ色の光が川を照らしている。

川原へもどりお姉ちゃんは服を手に取つた。昼間の暑さですつか

り乾いてる。お姉ちゃんは、スカートを自分の鼻に近付け、にかいだ。

「あー、やつぱつこやなこがつこやつてる」

さすがのお田さまも、この生臭いにおいはそれなかつたよつだ。仕方なく一人はその服を着ると、あのブロックをわたつて元来た道を歩いて行つた。

帰り道、一人が手をつないで歩いていると、悠斗がぐすんと泣き始めた。

「どうしたの？」

お姉ちゃんが悠斗の顔をのぞきこむと、

「…あのね、川におちたときすぐわかつたの……」

悠斗がしゃくつあげながら囁つた。どうやら今になつて恐怖がよみがえつてきたらしい。

「それくらいで泣くな。男の子でしょ」

お姉ちゃんはそう言しながら悠斗を引き寄せ、頭をなでる。少しずするとお姉ちゃんは、悠斗のまつべたを流れている涙を右手の人差指でとり、そのままなめた。

「あ、涙つて本当にしようばいんだ」

感心してうんうんとうなずいたお姉ちゃんは、手を離し、悠斗の前にしゃがんだ。

「ほら、あたしにのつかつて」

お姉ちゃんが、ふり向きもせずに促す。悠斗はすなおに、お姉ちゃんの背中に体をくつつけた。お姉ちゃんの背中は、あつたかくてとても気持ちいい。

お姉ちゃんは静かに立ち上がり、家へゆつくつと歩き出す。

悠斗は、すぐに平和な寝息をたてて眠りはじめた。

第一章 一家団らん

「おやいわねえ、あの子たちひいこまで遊びに行ってるのかしい」農作業から帰ってきたお姉ちゃんと悠斗のママが、玄関のドアの近くに座間着ていた上着をかけながらつぶやいた。

ママはソビングへもどり、壁時計を見上げた。六時を少し回っている。

「六時半を過ぎたら、パパとの辺を探しに行こうかな」

ママは台所へ向かいながら、不安そうにそう言った。

パパは今、畑でとれた野菜をトラクターで、家の隣にある倉庫に詰め込んでいる。

ママは腕をまくってHプロンを首にかけ、水道で手を洗う。そしてまな板や包丁を準備し、冷蔵庫からジャガイモや一斤ジン、玉ねぎなどを取り出した。

今日の夕飯はカレーだ。今日は少し疲れてるので、手のこんだ料理は作る気にはなれない。おとこの金曜日もカレーだったような気がするが、うちの家族はみな大のカレー好きなので、だれも文句は言わないだろう。

野菜をすべて洗つて包丁で皮をむき終わると、ママはジャガイモを手に取った。ママはふふっと笑う。

「子どもの頃よく正治さんが、『おれはジャガイモマンだぞ』とか言ってふざけていたつけ。それでわたしは『ニンジンちゃん』だつたわね」

ママは、幼いころ今の田那さんと『正義のヒーロー』をして、野山を走り回っていたことを思い出した。家が近所だったので、毎日一緒に遊んでいた……。

ママは、そこで我に返つた。

「やつだ、やつを作つてしまわないと……」

ママはジャガイモをまな板の上に置くと、それを少し大きめに切

つていく。パパが、カレーの具は大きめにしてくれ、と言つて聞かないのだ。パパによると、食べ応えのあるまろがいい、ということらしい。

カレールーを入れて煮込み始めたころ、ママはもう一度時計を見た。後五分で六時半になる。

いつも夕ご飯は六時半に食べ始めているから、もつすべ『おながすいた』と言つて子どもたちが帰つて来てもいいことなのだが、玄関の外につないでいる犬がうれしそうに吠える声は、まだ聞こえてこない。

五、六分たつて、カレーの香ばしいかおりがリビングのすみずみまで広がつた頃、表にいるウルフイグ『キヤン、キヤン』と吠えたした。ママはあわてて火を止め、玄関へと早足で向かう。

ママが玄関のスリッパをはく前にドアが少し開き、ツインテールの髪をした女の子が、辺りをうかがうように顔をヒョロリと出した。「コラ星奈！ 今まで外で遊んでるのよ。夕ご飯の前には帰つてきなさい」といつも言つてるでしょ

ママが、こしに手を当てる怒鳴つた。星奈と呼ばれたお姉ちゃんは、びっくりしたように瞬眼をこわばらせた。だが、すぐに口をとがらせる。

「だつて、外で遊んでたら時間なんてわからないじゃん。だから前から腕時計買つてよつて言つてるのに」

「何言つてるの。一ヶ月くらい前に、川でなくしたばかりじゃないの。そんなあなたに時計は持たせられません」

「それじゃ、帰る時間はわからないのは、ママのせいだよ

星奈がニヤツと笑う。

「そうね。そしたら今度悠斗に時計を持たせるから、そうすれば時間がわかるわよね」

ママが見返したような顔をする。

星奈は、不満そうにほっぺたをふくらませた。

「星奈、早く中へ入りなさい。悠斗が入つてこれないでしょ

ママがドアを開け、星奈の腕を引っ張った。悠斗が、目をこすりながら立っている。悠斗を中に入れると、悠斗のTシャツが薄く汚れているのに気がついた。

ママは星奈の着ている服も見た。「ケや泥があひこひこひいてる。

「あんたたち、一体何して遊んでたの!? いつも汚してきて……。服を汚さない遊びはできないわけ? 洗濯するのはママなのよ」ママがあきれたように言う。星奈が昼間あつたことを話そうとする、

「その話は後で聞くわ。とりあえずあんたたち、はやくお風呂に入つて泥を落としなさい!」

そう言つてママは、泥がこびりついている星奈の髪をなでた。ママは、くつを脱いだ一人をまっすぐ脱衣場へ連れて行つた。そして大きなバケツを一つ、洗濯機のそばに置いた。

「脱いだ服は、この中に入れておいて。着替えは後で持つてくるから。しつかりと体を洗つてから湯船に入るのよ」

一人は、はーいと答えた。ママは一人の着替えをとつて出でていく。星奈は服を脱いでダンゴのようにまとめて、バケツに放り込んだ。

悠斗は、ていねいに服を一枚ずつ入れていく。

「おそい! サッセと脱げ!」

悠斗がパンツ一丁になつた時、星奈が悠斗のパンツを勢いよくおろした。

「もう、やめてよお姉ちゃん!」

悠斗は文句を言つが、星奈は笑いながらドアを開け、お風呂場へ入つていく。悠斗もパンツを脱いでバケツに入れ、ペタペタと歩きながら中に入り、ドアを閉めた。シャワーの音と一人のはしゃぐ声が、すぐに辺りへ響いてきた。

「あんたたち、パパが帰ってきたらほんにするからね。早くお風呂上がるのよ」

着替えを持って戻ってきたママが、一応ドア越しに声をかけるが、

おやりく聞こえていないだらう。ママは、はあつとため息をついた。
ママは、お風呂のドアの向いがわにある棚に手を伸ばし、洗剤を
手に取つた。そしてそれを、子どもたちが脱いだ服の汚れている部
分にかけていく。こうしておけば、洗濯機で洗つたときに汚れが落
ちやすくなる。

ママは洗剤を元の棚へ戻すと、夕ご飯の準備をするために台所へ
もどつていぐ。

カレーのなべに火をかけたとき、玄関のドアが開く音がした。どう
やらパパが帰ってきたようだ。

「あなたお疲れさま」

ママはその場でふり返つて声をかけた。

「おう」

パパが短く返事をした。いつもより元気がないような気がする。
パパは、作業着姿のままソファにどかっと座つた。そしてリモコン
をつかんでテレビをつけ、NHKにチャンネルを合わせた。全国
の天気予報が映し出されている。

「ねえあなた、今年の野菜の調子はどう?」「

ママが、カレーをゆっくりと混ぜながら尋ねた。

「ああ、あまり良くないな。六月に大雨が降つただろ? あの時野
菜が水を吸いすぎて腐つたもんだから、だいぶ収穫量は落ちちまつ
た。まあ、ビニールハウスの果物はどうにかなりそうだ。四月に補
強しておいて正解だつたぜ」

パパは、テレビを見ながら答えた。

「異常気象なのかしら……?」

「そうだらうな。地球温暖化つてやつだらう」

パパは、はき捨てるように言つた。

お風呂場からは、相変わらず子どもたちのたのしそうな声が聞こ
えてくる。

「あれ、あいつらもう風呂に入つてゐるのか?」

パパがお風呂場のほうを見ながら驚いたように言つた。

「やつよ。あの一人また体中泥だらけにして帰ってきたのよ。洗濯する身にもなつてほしいわ」

ママが不満を口にすると、パパは大声で笑い出した。

「どうしたの？ 何がそんなにおかしいのよ」

ママは不思議そうに、パパのほうをふり向いた。

「いや～、おれも昔はあいつらみたいによく遊んでたのを思い出してな。服を汚して、おふくろこみくしりをぶつたたかれたもんだ」「そうね。たしかにずっと外を走り回っていたわ。わたしを無理やり引っ張つていいで」

「無理やりじゃないだろ。お前もうれしそうにしてたじゃないか」

「ええ？ そعدったかしり」

ママはあわてたようにカレーの皿に向きなおつ、再び混ぜ始めた。

十分くらいたつたころ、ドタドタとこづ音とともに星奈がすっぽりで走ってきた。片手には、悠斗のパンツが握られている。

「パンツかえしてよ、お姉ちゃん！」

と言つて悠斗も走ってきた。お姉ちゃんとちがい、ちやんとタオルを体に巻いている。

「あははは！ ほしかつたらあたしを捕まえてみなさい！」

星奈は悠斗の手を巧みにかわしながら、リビングをかけ回つている。

「こひ星奈！ いじわるしちゃダメでしょ。ちやんと服を着なさいママはカレーを入れるお皿を持ちながら注意した。だが、星奈が立ち止まる様子はない。

その時パパがソファからこしを上げ、そばを通り過ぎようとした星奈の前に立ちはだかった。星奈がパパのおなかに激突する。そしてその後ろを走ってきた悠斗も、パパの太い腕の中こすつぱつおさまった。

「おら～、パパがお前たちを捕まえたぞ～」

パパはニヤニヤしながら、二人の肩をガシッとつかんだ。

「やつたー、やつとお姉ちゃんをつかまえた！」

悠斗が、パンツを持っているほうの星奈の腕を持った。

「別にあんたに捕まつたわけじゃないもん。この勝負はあたしの勝ちよ」

星奈は口をとがらせながら、悠斗の手をふりはらった。またケンカを始めようとにらみあう二人を、

「お前ら、腹減つたら？ 早く服を着てカレーを食べような」とパパがなだめながら、脱衣所へ連れていった。

子どもたちがリビングへ来てすぐに、食事の時間になった。昼間暴れ回つてすっかりおなかがすいていた子どもたちは、もつと落ち着いて食べなさい、というママの声を無視し、子どもサイズのお皿に入れるカレーを、十分弱ですべてたいらげてしまった。

その後星奈は、上品にカレーを食べているママに向かって、昼間起きたことをしゃべりはじめた。

川に落ちた後、夕方までずっと裸で遊んでいたことを話した時、ママはのどを詰まらせた。そして顔を真っ赤にして星奈を十分ぐらにこっぴどくしかつた。

星奈はママのお説教には慣れているので、ときどき相づちを打つだけだった。

食事が終わつた後、ママは後片付けを始め、パパと子どもたちはテレビを見ていた。画面には、小学校のクラスの集合写真が映し出されている。生徒は全員、帽子と体操服姿だ。

『写眞の左上に『注目ください』というナレーターの声と同時に、画面がゆっくりと左上にズームアップされていく。

すると、画面から小さく悲鳴が聞こえた。パパと悠斗は興味深そうに田を凝らしながら見る。星奈は両手で顔をかくし、カタカタ震

える指を少し開けて、画面をみつめている。

その時、一番後ろに立っている生徒の肩の横に、ぽんやりと長い髪の女性の顔があるのが見えた。

パパと悠斗は『おおー!』と驚いている。だが悠斗の横にすわっている星奈は、

「キャー?」

「ねー」の声のような悲鳴を上げ、思わず立ち上がる。だが、不運にも床がフローリングであるため、星奈は足を滑らせ、思いっきり床にお尻を打ちつけた。悠斗がプツとふきだす。

「お姉ちゃん、あんなのがこわいの? ぼくはせんぜんへいきなのに」

「う、ひるとい! トイレに行こうとして立つたら転んだだけよ」「ふうん、でもお姉ちゃん、大きこえだしてたよね。あれってやつぱりこわかったんだしょ?」

悠斗がニヤニヤしながら星奈を見下ろす。

「う、ち、ちがうわよ! パ、パパ! は、はやくチャンネル変えてよ!」

星奈は首まで真っ赤にして、テーブルに置いてあるリモコンに手を伸ばす。しかしパパが、それをすばやく手に取った。

「星奈! いつもお前の好きなテレビを見るんだから、たまにはパパが見たい番組を入れてもいいだろうが。そんなに見たくなったら、自分の部屋に行けばいいんじゃないか?」

パパは、星奈を諭すように言った。悠斗がそっだ、そっだ! とヤジを入れる。すると、星奈はブンブンと首を横にふった。

「いやよー! だつてそうしたら、そうしたら」

星奈は、悠斗が見下しているような目で自分を見ているのに気付いた、言葉を詰ませた。

次の瞬間、何を言つたらいいのかわからなくなつた星奈は、台所でコメをといでいるママのもとへ走つて行つた。

「どうしたの、星奈?」

「後ろからこじて抱きつってきた星奈に顔を向け、ママが尋ねる。

「幽霊が、幽霊が、とても怖かったの」

星奈は、ママのHプロトンに顔をつづめた。ママは体を星奈のまつへ向け、胸と腕でやせしづくへ包む。

「大丈夫よ、幽霊なんていつもひつけなんだから、気にしなくていいわよ」

「本当?」

星奈が顔を上げた。

「当たり前じゃない。あんな非科学的なもの、しんじなくていいの

よ

ママがこじり笑った。

「おいおい、幽霊はうそっぽいじゃないだ」

パパが、ママと星奈のまつにふり向いて文句を言った。パパはいわゆる“オカルトマニア”で、幽霊やコーエフローの存在を本気で信じている。最近、悠斗もパパの影響を受けはじめ、オカルト系のテレビは必ずチェックしている。

「あのねパパ、今星奈をなぐさめてるんだから、余計なこと言わないで」

ママが、パパを家に忍びこんできた泥棒を見るよつな皿でこじりみつけた。

「そ、そうか。。。すまん」

パパはあわててテレビに視線を戻す。

星奈は、その番組が終わるまでずっとママにべつつき続け、一緒に一回田のお風呂にも入った。

都会と違い、この辺は夜になると車の走る音はまったく聞こえなくなり、恐ろしいほど静かになる。聞こえてくる音と言えば、飼い犬がときどき吠える声と、風が窓ガラスをカタカタと鳴らす音くらいだ。

国道沿いに家を構えている神崎家は農家であるため、朝がとても早い。九時半くらいなのに家に明かりが一つも付いていないのはそのためである。

その家の部屋の一つ、六畳半の女の子部屋の窓際にあるベットの中で、星奈は体を丸めて震えていた。

星奈は先ほどテレビで、幽霊の特集をした番組を見てしまい、太陽にも負けないいつもの元気な笑顔が別人のようにおびえきっている。

星奈は別に、気が弱い子ではない。むしろ男の子と平氣でケンカをするほど活発なのだが、幽霊だけは大の字が三つ付くほどきらいだ。

幼稚園の頃、遊園地のお化け屋敷でとても怖い思いをしたのが、いまだトラウマになっている。

星奈は、体にかけてあるタオルケットからぱはつと顔を出した。顔が風呂上がりのようにぼてつている。

今夜は一人では寝られない。星奈はそう思った。

「ママと一緒に寝ようかな」

星奈は小さくつぶやくが、すぐにそれは無理だと気付いた。ママはパパとダブルベッドで寝ていて、とても星奈が入れるスペースはない。

残る選択肢は一つしかない。星奈はがばつとタオルケットを手で払いのけた。

枕を持って足をそろつと床に置き立ち上ると、正面の棚の上に、

大きなクマのぬいぐるみが置いてあるのが目に入った。二つものかわいいクマさんが、暗闇の中で本物と入れ替わったように怖く見える。

星奈はあわてて視線をそらすと、枕を胸で抱きながら、ドタドタと走って自分の部屋を出た。

神崎家は夏の間、風通しを良くするため、すべての部屋のドアを開け放しにしている。

星奈は、向かい側にある悠斗の部屋にそのままのスピードで入り、ベッドで寝ている悠斗の体にかけてあるタオルケットをめくって、その中にもぐつた。するとすぐに、何かしらの違和感を感じ、悠斗が目を開けた。

「ん……？ うわあ！ も、お姉ちゃん？ なんでここにいるの？」

悠斗がおどろいたように、はね起きた。お姉ちゃんは自分の枕を、悠斗の枕のとなりに置いて寝ている。

「お姉ちゃん、起きてもお姉ちゃん。せまくなっちゃうから、じぶんのところでねでよ」

悠斗が困った顔をして星奈の体をゆする。すると星奈は目を開け、悠斗のほうに体を向けた。

「いいじゃない、今日は悠斗と一緒に寝たい気分なのよ」

星奈はせいこっぽい元気良くふるまおうとするが、声がヒリヒリヒリ震えてしまつてこう。

「……そんなにさっきのテレビがこわかったの？」

悠斗はあきれたように聞こえた。今年の四月に別々の部屋で寝るようになつてから、このようなことが一、三回あつたため、だいたい察しがついた。

「ふん！」

星奈は何も返す言葉がないらしく、そっぽを向いてしまった。悠斗はお姉ちゃんに背を向け、再び横になつた。

ふと、お姉ちゃんのまづからとい番りがしてくるのに気がついた。悠斗はお姉ちゃんのまづからい番りを向く。

「ねえ、お姉ちゃんからいこむがするね」「星奈がこちらに体を向けた。

「やつ? たぶんシャンプーのにおいだと思つよ」

星奈はやつ言つて、悠斗の頭のてっぺんに鼻をくつつけた。

「ほり、悠斗もやつのシャンプーのにおいがする」

星奈は笑顔で言つた。悠斗はくすぐったそつこして顔を向けた。それを見たお姉ちゃんは、安心しきつたように悠斗のほうを向きながら皿を開じた。

一分くらいたつた時、突然『カタン』とこづ音が悠斗の部屋に響いた。

「キャッ」

星奈が悲鳴を上げ、悠斗の背中に抱きついた。「うとうとしていた

悠斗は、お姉ちゃんに抱きつかれて一気に目が覚めた。

「お姉ちゃん、なにかあったの?」

「幽靈よ。今のは絶対幽靈よ」

星奈の歯がカタカタ鳴る音が聞こえてくる。

「え? ゆうれい?」

悠斗はうれしそうに言つて体を起こした。星奈も一緒に起きるが、悠斗にしがみついたままだ。

「幽靈いた?」

星奈が不安そうに、辺りを見回していく悠斗に尋ねた。

「いや、いないみたい。お姉ちゃんの氣のせいだよ」

悠斗は残念そうに言つた。

その時、正面の本棚の前にぼんやりとなにかが浮かび上がるのが見えてきた。十秒くらいたつた時には、それは人の形だといつ」とがはつきり分かるようになつた。

「だれかいる……」

悠斗は緊張した声でつぶやいた。

「冗談はやめてよー 悠斗ひどいー。」

星奈の悠斗を抱きしめる力が強くなつた。

悠斗はお姉ちゃんを無視し、抱きつかれながらひざで立つて部屋の電気をつけた。

一人の少年が、興味深そうにじらじらとみつめていた。

「うわあー！」

悠斗は、突然銃を突きつけられたようにびっくりし、ベットから落っこちた。悠斗に体重をかけていたお姉ちゃんも、一緒に尻もちをつく。

「きみたちは、オレのことどが見えるのか？」

その少年は、目を大きく見開いて二人に尋ねた。

「……う、うん」

悠斗が、うなずきながら答える。

「そうか、そうか。やつと会えたか。いやー正直うれしいぜ。誰にも気づいてもらえなかつたからな」

少年は、ポリポリと頭をかいだ。

悠斗は、その少年をよく見てみた。坊主頭で、ランニングシャツと短パンをはいでいる。年はお姉ちゃんと同じくらいだらうか。

「あ、あの……、きみはいつたいどこから入つてきたの？」

悠斗がそう訊くと、少年は驚いたような顔をした。

「……どこからつて、壁をすり抜けってきたんだよ」

少年は当たり前のようになに言つた。

「すり抜けてきたつて、どういうこと？」

悠斗の言葉に、少年は訳がわからぬといつぶつうな顔をする。

「お前もしかして、『幽霊』が壁をすり抜けられるることを知らないのか？」

悠斗は、口をあんぐりと開けた。

「ほ、ほんものゆうれいなの？」

「そりゃそりゃ。いんな幽霊らしき幽霊はいなこと思つぜ」

「で、でも……。足があるよ」

「幽靈が全員、足がないと思つてもうつむけや困るな」

「幽靈だと言つた少年は、苦笑いした。

「ところで、お前のとなりで丸くなつてこるのは、お姉ちゃんかい？」

幽靈は、星奈を指差す。その言葉に、床に顔を突つ伏している星奈は、ビクッと反応した。

「ねえ、きみの名前はなんていうの？」

幽靈は、甘い声で星奈に尋ねた。

「……星奈」

星奈は、十秒ほど間をあけて答えた。

「へえ、星奈ちゃんつていうんだ。かわいい名前だね」

幽靈は、につこり笑つて言つた。

かわいいと言われて、星奈は少し気持ちが落ち着き、恐る恐る顔を上げた。

「あなた、本当に幽靈なの……？」

「さつき言つたじやん。本物の幽靈なんだよ」

幽靈は、めんどくさそうに答えた。

「でも、人間にしか見えない……」

たしかに、まったく体はすけていないし、普カ普カ浮かんでもいない。むしろ色がはつきりしている。

「うーん、これはオレの想像なんだけど、人間と幽靈つて相性があると思うんだ。きみたちはオレのことがはつきり見えるんだり？だからきみたちとオレは、とても相性がいいんだよ」

幽靈は、言葉を慎重に選びながら語つた。すると、悠斗が立ち上がり、ベットの上にこしを落とした。

「ねえ、ところできみはここに何しに来たの？」

悠斗が、田をキラキラさせて訊いた。幽靈と会話をしているだけでも、うれしいようだ。

「よくぞ聞いてくれた！ オレもそれを聞いたかったんだ。……い

いかお前たちよへ聞けよ。おれはなあ……お前たちと遊びたいんだ！」

幽靈は両手を横に広げて言った。あまりにも意外な告白で、一人は返す言葉が見つからない。

十五秒くらいたつて、ようやく悠斗が口を開いた。

「ぼくらとあそびたいって？　どうじうこと？」

幽靈はため息をついた。

「あのなあお前ら、人の話は一回で聞くもんだぜ。おれは、もう一度誰かと一緒に遊びたいんだ。……この体になつて五十年くらいたつけど、まだ誰とも遊べてないんだよ。たいていの人に聞こえはオレのことは見えないし、見えていても怖がつて逃げ出しちまう。そんな時出会つたのが、お前たちだ。お前たちはオレの話をちやんと見てくれるから、きっと遊んでくれると思うんだ。だから、……オレと遊んでくれないか？」

幽靈は一気にしゃべると、胸の前で腕を組んだ。

「……いいけど、なにしてあそぶの？」

悠斗がぼそっと答えた。

「うーん、まだ決めてないんだけど、オレは……」

幽靈が考え始めた時、階段を誰かが上がつてくる音が聞こえてきた。そのとたん、幽靈がすつと立ち上がつた。

「悪い！ 続きの話はまた明日な」

幽靈はそう言い残すと、窓に向かつて走つて行つた。そして壁に激突するか、と思いきや、体が壁にすつと溶けて消えてしまった。

「あれ？ あんたたち何してるの？」

パジヤマ姿のママが、驚いた顔をして言った。

「なんで電気なんかつけてるのよ？ ……せっぱぱりお姉ちゃんは、」「……いたか

ママも、星奈の心は読めているようだ。

「あのね、ぼくたちゆうれいに会つて、おはなししたんだよ

悠斗が、うれしそうな顔をした。

「え、幽霊？ あんた夢でも見たんじゃないの？ ……とにかくもう遅いんだから、早く寝なさい」

ママは、まだ話しきりなさそうつな悠斗と、ビクビクおびえている星奈をベッドに寝かせ、一回辺りを見回すと、電気を消して悠斗の部屋を出て行った。

ママが階段を下りて行った後、悠斗はお姉ちゃんに尋ねた。

「わいわのゆうれこは、ほんものだつたよな？」

「…………」

お姉ちゃんはおひつじと、悠斗に向かって、皿をギョシヒ墨じた。

第四章 ゆう君誕生

「うへん……」

本物の幽霊と突然出会い、しかも会話までしてしまった日の翌朝、星奈はうつすらと目を開けた。

その瞬間、太陽光線といつ名の矢が、星奈の目に突き刺さつてきた。星奈は、

「うひ」

と声をあげ、おまわりさんに見つかってライトを照らされたドロボウのように、右手で目を覆つた。

数羽のズズメの声が、窓の外から聞こえてくる。それはまるで、『おはようー』とあいさつをしてくるようだ。

昨日閉めたカーテンは全開になつていて、朝から元気いっぱいに働いている太陽の光が、星奈の顔にギラギラと降りそそぐ。星奈の額に、汗がにじんできた。

一分くらいたつて、目が明るさに慣れてくれたころ、星奈はようやく目を覆っていた手をどけ、目を開けた。すると、ベットの横に誰かが立つているのに気づいた。逆光で輪郭しかわからない。

「誰……？」

星奈は寝ぼけた声でそういうと、首を少し左へひねった。

そこに立つていたのは、坊主頭の少年だった。星奈の顔を、興味深そうにじろじろとのぞきこんでいる。

「キヤーー！」

星奈はめいっぱいのどを開いて叫ぶと、あわてたように悠斗が寝ている壁側へ転がる。そして悠斗の背中を押しつぶして、悠斗と壁の間に入りこんだ。

「ぐふつ」夢の中で大好きなドーナツを腹いっぱい食べていた悠斗は、星奈お手製のロードローラーによつて無理やり現実へ引き戻され、一、二秒の間息が止まつた。

「なにするのや、お姉ちゃん！」

悠斗は、いつの間にか自分と壁との間に挟まっているお姉ちゃんに、顔を向けた。すると星奈は震えた声で、

「幽靈　、そこに幽靈が　…」

と言い、手をギョシとつぶりながら向こう側を指差した。

悠斗はその指先をたどっていいく。するとベットのすぐ横で、坊主少年が一〇一〇笑いながら右手を軽く振っていた。

お姉ちゃんに押しつぶされて不機嫌だった悠斗の顔が、たちまちぱあっと明るくなる。

「ああっ、ゆうれいだ！　朝なのにゆうれいが出でる…　どうしてどうして？」

悠斗はそのまま机とベッドを這つていき、そのままじつに座った。

「わいやわいや。朝になつたからつて消えるわけじゃないよ。見える人にはいつでも見えるもんさ」

幽靈は、澄ました顔で答えた。悠斗はふーんと納得する。

「ところで、今日は何しに来たの？」

悠斗が、ワクワクと心を弾ませながら訊いた。幽靈がため息をつく。

「おじおい、昨日言つただろ？　オレと一緒に遊ぼうつて約束したじゃねえか。お姉ちゃんと仲良くなれんねしたら、すっかり忘れちまつたのか？」

幽靈は、両手を右のまつげたにくつけて首をかたむけ、眠るポーズをとった。

「お、お姉ちゃんがかつてにほくべのベットに入つてきたんだよ。別にいつもにならかつたわけじゃないもん」

悠斗はまつべたをふくらませる。すると幽靈はふんつと鼻を鳴らした。

「なに言つてんだ。お前気持ちはやつて寝ただろ。お姉ちゃんと顔がくつつきになつてたぞ」

幽靈は、少しうつりやましそうだ。

「あ、あんたずっとここ見てたの？」

落ち着きを取り戻した星奈が、今度は怒った顔で幽靈をこりみつけた。

「やつれ。昨日の夜、きみたちのママが部屋を出て行って少しつてから、またここに戻つたんだよ。少し前までおびえてた星奈がすっかり寝てしまつたのには、少しひくらしたぜ」

「朝、あたしの顔を見てたのはどうして？」

星奈が、ひたいにしわをよせながら尋ねると、

「こや～きみの寝てるときの顔がとてもかわいくて。ここに見入っちゃつたんだ」

と幽靈は頭をかきながら恥ずかしそうに言ご、横に視線をそらした。

幽靈からそんな言葉が飛び出していくとは思わなかつた星奈は、顔を赤らめ、がばつとベッドからはね起きた。

「悠斗ー やつさと起きて着替えなさいー！」

星奈はドアのまつを見て、クックッと笑つてこつた。

「もうおきてるの？」

悠斗は不満そうに言つた。

幽靈はドアのまつを見て、クックッと笑つてこつた。

た。

「もうおきてるの？」

悠斗は不満そうに言つた。

幽靈はドアのまつを見て、クックッと笑つてこつた。

悠斗はそれをかれいにキヤツチし、レンジとは反対側にある炊飯器のところへペタペタと音を立てながら歩く。

炊飯器からは、モクモクと水蒸気が立ちのぼっている。悠斗は、近くに置いてある丸イスを持ってきてその上に乗り、炊飯器のふたを開けた。そのとたん、ものすごい熱気が悠斗の顔を包んだ。

「あつちー！」

悠斗は、あわてて丸イスから飛び降りた。

「バカねー、スイッチ切らないと熱いに決まってるじゃない」

星奈がこしに手を当て、首だけこっちに向けながらあきれたように言った。

悠斗は、少しおねえちゃんをにらんだが、何も言わずに炊飯器に手を伸ばし、『切』のボタンを押した。

『ごんを盛つた二つのお茶わんをお盆に乗せ、リビングへ持つていこう』とすると、

「まつて、これも持つていいよ」

と星奈がみそ汁を二つ、『ごんの横に置いた。

お盆が少し重くなり、悠斗は少しうつづく。そのままテーブルへ運んでいくと、幽靈が悠斗のまつを向いてイスに座っているのが見えた。

「おつ、落つことすなよ？ オレが手伝つてやるうか？」

幽靈が一ヤ一ヤ笑いながら尋ねた。

「どうせさわれないくせにー！」

悠斗が顔をひきつらせながら答える。幽靈がゲラゲラ笑い、

「そうか、そうだよなあ！ 手伝つてやりたいけど、それじゃ仕方ないよなあ」

とバカにしたような顔で、悠斗を見る。

悠斗は、慎重にお盆をテーブルへ置き、『ご飯とみそ汁を対になるように並べた。

お盆に、少しみそ汁がこぼれている。

『チン』

レンジからおなじみの音が聞こえた。その中から星奈が、ラップがかけられているお皿を一つ取り出す。

熱い熱いと言いながら星奈は、早足でやつてきてテーブルにお皿を置いた。ラップを外すと、隣でティッシュを使ってお盆をぬぐっている悠斗の耳たぶを二つ、両手の親指と人差し指でつまんだ。

「あつつい！ なにすんのをお姉ちゃん！」

悠斗が首をブンブン振って星奈の手から逃れると、星奈は

「あははは！」

と笑い、外したラップをゴミ箱へ捨てにいった。

「きみたちは、いつも朝はこんな調子なのか？」

幽靈は一人を交互に見ながら言った。

「そうだよ。お姉ちゃんがいつもぼくをからかうんだな」

「へえ うらやましいもんだな」

幽靈が悲しそうな顔をしてつぶやく。

「なにがさ。こんなことされてどこがいいの？」

悠斗が、自分の耳たぶをつまむ。

幽靈が口を開けつつした時、星奈がすり込みようにして幽靈に向かい側のイスに座った。

「さあ、さつさと食べちゃうわよ」

星奈は箸をつかみ、お茶碗に手を伸ばす。

「まつてよ、お姉ちゃん」

悠斗が、あわてて幽靈のとなりにすわる。

「ちゃんと『いただきます』を言わないとダメなんだよ」

悠斗は手を胸の前で合わせながら言った。

「そうだな、ちゃんとあいさつしないといけないもんな。お姉ちゃんなのにそれを忘れちゃマズイよな～」

幽靈が、口の端を曲げて笑う。

「『なーなー』つていうのたいわよー。『言えばいいんでしょ、言えば

！』 といひで、なんであんたもそこに座つてんのよ」

星奈は幽靈を指差す。

「……じゃないお姉ちゃん。ゆうれいなんだから、おかずをとられる」とはないよ」

「そんなことを言つてるんじゃないわよ。幽靈が前にすわつてたら、落ち着いて食べられないでしょ」

「おいおい、そんなひどい」と言つた。オレたちほもつ友達だろ？」

星奈のひたいにしわが寄つた。

「え、どうこいつ? あたしたち二つから友達なんかになつたのよ」

「やつたー! ゆうれいとお友だちになつたー!」

悠斗は両手を上げて喜んでいる。

「これから一緒に遊ぶんだから、友達じゃないか。それともオレが怖くて一緒に遊べないのか?」

幽靈が不安そうに尋ねる。

「昼間に幽靈を見たつて怖くないわよ。暗い所で、突然目の前に現れるのがイヤなだけ。 つていうかあんた、普通に見たら人間にしか見えないわ。何かにさわろうとしてさわれないのを見て、気づかされるくらいよ」

「そうか、それなら安心だ」

幽靈が、胸をなでおろした。

「お姉ちゃん、早く食べないとみそ汁をめちゃうよ」

悠斗が口をはさんだ。

「あ、そうね。もうおなかペコペコよ」

星奈が、幽靈をちらりと見る。そして両手を胸の前で合わせ、

「『いただきまーす!』」

と一人で声を合わせて言つて、一人はそろそろはんから食べ始めた。

「ねえ悠斗、そこにあるしょくゆをちょうだい」

星奈が、悠斗の近くに置いてある小瓶を指差す。

「ん」

悠斗が、口をもぐもぐさせながら手渡した。

「サンキュー」

星奈はお皿に乗つていい田玉焼きの真ん中に、しょうゆをドバードとかける。お皿をまの光でキラキラ光つていた白鳥が、しょうゆ色でくすんでしまった。

それを見た幽靈は、うつと声を上げた。

「おまえさあ、いくらなんでもかけすぎじゃないか？ セツカグのタマゴの味が薄れるだろ？」

「うるさいわねえ、いいじゃない。あたしさしようぱこぱしが好きなのよ」

幽靈はあきれて、悠斗のほうを見た。そこには、お姉ちゃんのようないい顔はないだらう。

悠斗も、田玉焼きを味付けしていた。だがそれはしょうゆではなく、お塩だった。ラベルには『国内産』と書かれている。

悠斗は、塩をかけすぎないようにするため一回手のひらで取つてから、均等に降りかかるようにしている。

姉と弟での差は何だらう。この姉、今は華奢な体つきをしているが、三十年くらいしたらきっと血がドロドロになつてゐるに違いない。

「ところで、」

食事を半分ほど進めた星奈は、突然箸をおいた。

「あんたはいつたい何者？ 何しに来たの？ そもそもなんであたしたちの家に来たわけ？」

星奈は、マシンガンの「」と質問をぶつけた。

「こつぺんに訊かれても困るなー。 わかったよ。そういうえばオレのことは向にも言つてなかつたもんな」

そこで幽靈は、せきばらこを一つした。

「オレは幽靈になつてから五十年くらい全国を回つて、一緒に遊んでくれる人を探してたんだ」

悠斗が『五十年も？』と驚きの声を上げた。

「そりゃ。オレのことが見える人はたまにいたんだけど、とつても怖がって遊びどころじゃなかつたな。そろそろ、お祓いがして入れなかつた家もあつたぜ」

そこまで話した時、星奈が口をはさんだ。

「どうしてそんなに遊びたいのよ？」

すると幽靈は、少し悲しそうな顔をした。

「オレ、友達が全然作れなくて、いつも一人で遊んでたんだ。川でおぼれて死んだ時も一人だつたから、せめて誰かと楽しく遊んでから成仏したかったのや」

幽靈のその言葉に、悠斗は感動して立ち上がつた。

「わかつた！ いつしょにあそぼう。ぼくたちともだちだよ」

「本当か？ ありがとう… きみは心の友だ！」

幽靈は悠斗に抱きつこうとするが、当然のようにお互に触れることはできない。

「そのセリフ、どこかで聞いたことあるんだけど…？」

悠斗が不思議そうな表情をした。

「ああ、先週やつてたアニメで聞いた言葉だからな」

幽靈は、星奈のほうを向いた。

「星奈も、遊んでくれるのか？」

星奈はすこし考えた。

「ま、まあ、悠斗をあんたと一人つきつにしておくわけにはいかないし、弟の面倒を見るのはあたしの仕事だし。ついでに遊んであげるわよ」

「ねえねえ、何してあそぶの？」

悠斗がテーブルに身を乗り出した。

「そうねえ

星奈はうーんとうなりながら腕を組んだ。幽靈と遊べることなんて考え付かない。サッカー や野球はできなさそりだ。
「かくれんぼだ！ かくれんぼにしよう！」

幽靈は興奮しながら提案する。

「そう、それがいいわ！ それにしましょ！」

「かくれんぼなら、ぼくとくいだよ」

悠斗が胸を張つて言つた。

「へえ、それは楽しみだなあ」

「さあ、そうときまつたら早く食べちゃいましょ！」

星奈は再び箸を手に取つた。悠斗も「はんを口にかきこむ。

「あのや　きみの名前って　なんていうの？」

リスのように口の中に食べ物を詰め込んだ悠斗が訊いた。

「うーん、実はオレ、幽靈になつてから記憶がどんどんぬけてきて
や。じぶんの名前も思い出せないんだ」

幽靈が恥ずかしそうに答える。

「え～、自分の名前なんて一番忘れないものでしょ」

星奈はあきれたような声を出す。幽靈は苦笑いすると、だまつてしまつた。

一十秒くらいいたつた時、

「きました！」

と悠斗が叫んだ。

「何が決まつたのよ？」

星奈はけげんな顔をする。

「ゆうれいのなまえや」

悠斗は幽靈のほうへ向き、犯人を見つけた探偵のよう指差した。

「ゆう君！　きみの名前はゆう君だ！」

悠斗は笑顔で言い放つと、自分のイスへ座つた。

「なんで？　どうしてゆう君なのよ」

「もしかして幽靈だから『ゆう霊』なのか？」

「うー！　あたりだよ」

悠斗は涼しげな顔をしていふ。

「まったく、あんたはどういうセンスしてるのよ」

星奈は不満そなだが幽靈、基ゆう君は、

「オーケーだよ。いい名前だ。友達に名前を付けてもらいつなんて

「 とっても嬉しいよ」

と満足していく、やつ痴のひとみが、うなづくことになる。

「あれ、幽霊なのに泣いてるの？ 鬼の田にも涙つてやつ？」

星奈の、その言葉の使い方にはまだしか間違っているが、それに気がつく者はいない。

「ち、ちがうぞ！ これは その 田から汗が出てるんだ！」

夏は暑いんだから汗をかくにきまつてるだろー！」

やつ君は、その場をにげるよつにして出て行け、一階へ上がりつて
いった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0624y/>

ぼくのお姉ちゃん

2011年11月12日03時22分発行